

# 反障害通信

16. 8. 11

59号

## 相模原事件について・・・優生思想との対峙のために —「犯罪の社会モデル」を考える立場から—

相模原で「重複知的障害者」19人の殺人事件が起きました。

わたしはこの事件のことを聞いたときに、衝撃が走りましたが、むしろ起こるべきして起こった、とうとう起きたかという思いをもってしまいました。わたしはかつて、石原慎太郎都知事が、「障害者施設」を訪れ、「あのひとたちに人格はあるのかね？」という発言をしたことと（主たる対象者は一応違いますが）ヘイトクライムのひとたちが「〇〇を殺せ」とコールしていたことの交叉するところで起きた事件だと感じたのです。

これは「障害者」の介助をしていたひとが優生思想に取り込まれて起こした事件として多くの「障害者」に衝撃を引き起こしています。で、薬物を使っていたとか、「措置入院」していたとか、「精神障害者」の起こした事件として、また「精神障害者」の観察・予防拘禁を強めようというような動きが出ています。

世界に名だたる悪法「医療観察法」が作られたのは、池田小事件の後でした。しかし、そもそもこの事件を起こしたひとは、「精神障害者」認定されず、従って刑法除外規定に当てはめられず、死刑を執行されています。「人格障害」(※1)という意味不明の規定をされたまま、なぜ、どのようなところで事件が起きたのかという検証がなされないままなのです。

さて、そもそも今回の事件で、「措置入院」していたという報道がなされ、まるで、この事件の以前に「措置入院」があったという誤解を生み、「精神障害者」への予断と偏見を招いています。そもそも今回の事件を予告するような発言をしていて、しかも、衆議院議長の処へ犯行を臭わせる手紙を持っていき、警視庁から神奈川県警の方に連絡が行き、職場でも問題になり辞めさせられという経過があります。そこで、ヘイトクライムとか差別禁止法などの現在の法体系では対応できず、精神医療鑑定を受けさせ、措置入院されたということのようです。結局、薬物反応が出て、「人格障害」の類の診断を出したものの、「精神障害」とは認められず、どういうわけか薬物の方でも刑事事件化されませんでした。報道されている範囲の話ですが、警察は防犯カメラをつけるよう指導したそうです。防犯カメラというのは、犯人を後で逮捕することには使えますが、今回のような逮捕されることを覚悟した事件には何の効果もありません。「措置入院」していたときから、この事件がおきるまでかなりの時間があります。どのような経過があったかの検証が必要だと思っています(※2)。ともかく、警察の警備のイロハも知らないような対応の中で起きた事件ではないかとわたしは考えています。

そもそも施設ということがどのような意味をもっているかの「障害者」の自立生活運動からの批判もありました。そして施設で介助労働者の働く条件が、アベ政治の福祉の切り

捨ての中で、ますます厳しくなっていくという問題もあります。そして、「介護職員がなぜ」ということには、アメリカの人種差別の問題で、日常的に接している「プアーホワイト」と呼ばれるひとたちが最も人種差別的になっていくという分断や差別への取り込まれの問題にも類比されます。そこにファシズム的思想の広がりを取り込まれの問題を押さえねばなりません。

さて、もうひとつの問題を書いて置きます。これは優生思想にとりこまれたひとの事件で、事件をおこしたひとが言っているようなことを、多くのひとが日常的に話しています。その端的な例が、前述の石原慎太郎元東京都知事発言(※3)で、この数々の分野で、元祖ヘイトクライムともいえるべく、差別発言をくりかえしていたひとが、都知事を何期も務めていく、石原都知事に投票していたひとは勿論、反対していた阻止し得なかったひとにも、その責任はあると思っています。そして、戦争とそこから引き起こされるテロの事件の頻発化、ヘイトクライムの世界的爆発、そういう中で、まさにヘイトクライムとして起きた事件ではないでしょうか？

わたしは刑事事件の多くは、(一部の権力犯罪を除いて)差別の反作用として起きることだと押さえています。そのような観点で、裁判員裁判が始まる時に、この差別的な社会を構成してしまっているひとが、社会が差別が「犯罪」を起こすと言い得る内容で、その社会を差別を裁かず、そしてその社会を構成してしまっている自己を裁かないで、どうして「犯人」とされるひとを裁くことに加担し得るのかという問題を提起してきました。

わたしは「障害者運動」の一翼を担い、障害問題を考え、論じてきました。今、「障害の社会モデル」という考え方が広がっています(※4)。それは「障害とは社会が「障害者」と規定するひとに作った障壁である」と定式化されるのではと思います。それと同じように「犯罪の社会モデル」ということを突きだし得ます。それは「犯罪とは社会がひとを差別するとき、その反作用として「犯罪者」として引き起こされる事件である」と定式化できるのではと思います。

そのようなことを考えながら、「障害の否定性」の否定というところで、優生思想的なことに対峙しつつも、結局広く深く優生思想に多くのひとがとらわれている、そしてそのことを止め得なかった自らの責任ということを考えています。反原発で論陣をはっていた小出さんが、フクシマの事故が起きたときに、止め得なかった自らの責任ということで涙していました。積極的に優生思想を広めようとしているひとたちの責任はいうまでもなく批判していくことですが、日常的に優生思想にとりこまれているひと、そして反対していてもその流れを止め得ないということでの、この社会を構成させられているところでの責任があるのです。

さて、ヘイトクライムや差別に対して法的な整備で規制していこうという動きがありません。過渡的には、権力犯罪や権力に癒着したひとたちを取り締まるためにも、そのことの必要性はあるかとも思いますが、わたしは反差別運動の中で語られてきた「法律で差別をなくすことはできない」と考えています。それは国家という名で、すなわち権力という差別の構造に頼って犯罪を押さえ込む、差別で差別を押さえ込むということは原理的に考えてできないのです。そしてヘイトクライムや差別に対して法的な整備をしていくことが、時の政府への批判的な動きをも規制していく恐れが出てきます。まさに、それがファシズ

ムなのです。

結局、現実の差別的動きにカウンター的行動をしていき、そしてこの日常に広く行き渡っている優生思想などに対抗する反差別の思想を広めていくしかないことだと思うのです。国会ではなんどもひとの命を序列化するような「尊厳死法」の上程がなされています。そして、ひとの命の序列化ということで、臓器移植のために脳死をひとの死と強引に規定した「脳死・臓器移植法」の下で、脳死臓器移植が進められています。そして、介護の研修で講師が生徒に「自分が介護を受けるようになったら、延命処置を望みますか？」と訊くと、8割のひとが「望まない」という答えをするという話もでてきます(※5)。最近、高齢者やその手前にいるひとたちが集まると「ポックリ死にたいね」というような話を頻繁にしています。そのような優生思想が広まり、それに取り込まれたひとが起こした事件なのです(※6)。

まさに戦争とファシズムへの突撃が開始されようとしている(もう始まっているのかも知れませんが)ときに、優生思想がますます強められ、「障害者」の抹殺や抑圧が強められる、そして福祉が切り捨てられていく、そのことに対抗するすべての弱者の反ファシズム的(※7)運動が必要になっています。

もう一方で、日々の日常での接点を創り出していき、まだ知らないから忌避的になる差別的になることもあるからです。ですが、まさにその接点を作ること自体が極めてつらいことになっています。きちんと、優生思想に対峙し得る理論化の作業が必要になっているのです。

わたしも接点を作る作業と、これまでやってきた理論化の作業を広め深めていきたいと思っています。

#### [註]

※1 「人格障害」という概念自体が、わたしはそもそも理解しがたいこととしてあります。要するに「精神障害」とは言えないけど「性格がねじ曲げられた」ということで、裁こうと言うことで、理解しがたい行動をするひとなのですが、なぜ、ひとはそのような行動をするのかをきちんと押さえていくと、そこに差別の中で「ねじ曲げられた」性格が作られた、ととらえられます。「性同一性障害」とかいう概念と同じで、そもそも「障害」とはいえないことを無理矢理「障害」として医学モデルに押し込めるために意図的に作られた概念ではないかと思うのです。

※2 わたしは警察が何か情報を隠しているのではないかと思ったりしています。「警備のイロハも知らない」と書きましたが、これはISなどのテロ対策を考えたら、信じられない対応です。

※3 石原慎太郎発言をとりあげた朝日新聞に石原都知事が産経新聞などの援護を得て反撃し、その後のマスコミの萎縮などをもたらした結節点になったのではと思います。きちんと、石原発言を追い、論理的に追及していくと石原都政が継続できるはずがなかったのですが、そもそもマスコミは財界で保守とつながるところで、一記者での追及は頓挫せざるをえなかったのかもしれませんが、これについてはわたしのHPに載せている「障害っ

てな一に？」の2章を参照してください。

※4 イギリス障害学発の「社会モデル」は、第2世代の批判の中で、今混乱的情况にあります。そのことの整理がなされないことが、今日の「障害者運動」の停滞を招いているとの思いで、わたしなりに整理をしようとしています。語学の壁にたじろいでいるのですが。

※5 これはわたしが母を看取って介護の反省をしておきたいと、高齢者介護の講座に通っていたときに、講師が言っていたはなしです。どこまで普遍化できるか分からないのですが、これから介護の仕事をしようというひとが老いの否定性にとらわれている、ひいては「障害の否定性」にとらわれていることにわたしはショックを受けました。

※6 こういうことを書くと、ひとの主体性ということをスポイルしているという批判を受けます。それが、「障害の社会モデル」の批判の一端でもあるのですが、本文中にも書いているように、わたしは運動主体としての責任性はむしろ問い返そうとしています。ですが、運動主体として確立していない、情況に巻き込まれていくひとの自己責任論には批判的です。また、そういうところは個ということを実体主義的に固定化しているという批判をしつつ、「社会」ということの実体化も批判する関係モデルを突き出しています。ここではそこまできちんと展開し得ないので、「社会モデル」から更に展開している関係モデルについては『反障害原論』を読んで下さい。

※7 そもそも現在の状況をファシズムととらえるのか、また胎動的なファシズム「的」動きとしてとらえるのかの判断がわたしにもよくつかめていません。ただ、「的」を外すときには、その反ファシズム運動はもう敗北的情况に陥っているのではという思いがあります。ですから、「的」的情况の内につぶさなければと思っています。

(み)

## HP 更新通知・掲載予定・ブログのこと

◆「反障害通信 59号」アップ(16/8/11)

◆「反差別論序説草稿」を少し書き換え、第3版にしました。この「草稿」は「通信」で「反差別原論」を書き下ろし的に連載していく草稿にもなっていくのですが、とりあえず不備としてきになっているところを改めました。

◆今回の文の中で参照の文献にしたので、「障害ってな一に？」を再度ホームページにアップしました。書籍化の関係ですぐ消すかもしれませんが、とりあえず参照ください。

◆ホームページもブログも少し読みやすくするために整理しようと思っています。宿題の作業が落ち着いてから、読書メモに出している本を参考文献として、アップしていく作業もやっていかなくは、そして、読書メモも著者との対話として、それを届ける作業もしていかなくはとも思っています。

## 読書メモ

今回原発関係の本だけ。ちょっとバタバタしていて読書が余りできませんでした。

たわしの読書メモ・・ブログ 341

### ・山秋真『原発をつくらせない人びと——祝島から未来へ』岩波書店(岩波新書)2012

すさまじい闘いの記録です。読んでいて感激と悲しみで涙が出てきます。

祝島あたりは海賊の末裔のひとたちが住む地ということもあるようです。どんなに諍いがあっても、冠婚葬祭、とりわけ葬儀は別ということがありますが、ここでは、そこでもつきあわない、そこまでしないと切り崩されて闘い得なかった、というところで、徹底して闘った記録が書かれています。原発の被害は、放射線被害ではなく、金でひとを屈服させ、丸め込もうとする、地域を切り裂いていくのです。そこで関係を切っても(単純に切っているのではないようですが)闘ったという記録です。今日の沖縄の辺野古新基地建設の闘いの原型のようなことも感じていました。

運動は一般的に、敗北の積み重ねが多いのですが、反原発ということでは、とりわけ初動段階であちこちに勝利したところもあります。祝島は、壮絶な闘いの中で止めつつ、つぶされる寸前まで行ったところで、フクシマ事故があり止まっています。この「通信」の編集中に、山口県が埋め立て申請を許可したという報道が出ています。

美しい、自然との共生的な生活の様子も描かれています。地域格差と収奪の構造の中で、過疎に陥らされる地域の現状や、また逆に U ターンしてくる地域創生ということも孕みつつ、闘いの中の人間模様ということも描かれていて、感動的な本です。

たわしの読書メモ・・ブログ 342

### ・本間龍『原発プロパガンダ』岩波書店(岩波新書)2016

ナチスの宣伝省を想起させるようなところでの、まさにプロパガンダ。

著者は二代広告会社、博報堂の元社員。原発に関しては、電通を中心にした、練りに練られていく戦略があると、記されています。

抜き書き的にメモを残します。

なぜ「安全神話」とまで揶揄されるプロパガンダが必要だったか？ 原発そのものが不完全なもので危険だったから、地震大国の日本で原発など作るのが不向きなところで作ったから。6p

「国民の多くがプロパガンダの存在に気づいていない、という状況こそ、その成功を如実に物語っている。だまされている人々にそれを認識させないことこそ、プロパガンダの目的であるからだ。」 7P

「ではなぜこんなしくみが長年露呈しなかったのか。最大の理由は、本来警鐘を鳴らすべき報道メディア（新聞やテレビ、雑誌等）が完全に抱き込まれ、原発推進側（原子カムラ）の協同体になってしまっていたことだ。メディアは長期間にわたり巨額の「広告費」をもらうことによって原子カムラを批判できなくなり、逆にそのプロパガンダの一翼を担うようになってしまった。」 7-8P

競争が存在しない地域独占企業の電力会社が、なぜ巨大な宣伝費を使ったのか・・・マスコ操作を通した、国民意識の操作のため 12P・・・安全でないものを安全と言いくるめるため

「刷り込み効果」 13P

戦前の精神論やイデオロギーと違った、原発のプロパガンダの「経済的安定」と「豊かな生活の保証」というスローガン 14P

なにかトラブルが起きると、逆に広告費が増えていく電通の原発宣伝費 19p

広告費を払うことによる、メディアに対する暗黙の圧力 21P

「三要素が密接に絡み合ってメディアを骨抜きにし、国民を洗脳していた。」 25P・・・

(A) あらゆるメディアを使用した広告展開 (対国民)

(B) 電気事業連合会によるメディア監視 (対メディア)

(C) 巨額広告費を背景にした言論封殺 (対メディア)

フクシマ後「原発PRに手を染めていたプロパガンディストたちの狼狽ぶりは、まるで戦争に敗れた国が大慌てで戦争犯罪記録を焼却するかの如くだった。」 140P

たわしの読書メモ・・・ブログ 343

・広瀬隆『原発処分先進国ドイツの現実: 地底 1000 メートルの核ゴミ地獄』五月書房)2014

著者が国会議員の山本太郎さんとドイツの原発処分の状況を視察に行った報告的記録です。

ドイツはフクシマ後、2022年までに、原発をすべて廃炉にすると決めたのですが、まだ予断を許さないような状況もあり、地層処分ということが実はずさんになされている危うい現実を報告してくれています。

まして、地震国日本で地層処分など適うわけがなく、そういう状況でそもそも原発などなぜ作ったのか、そして再稼働さえしている恐ろしい状況に暗雲たる気持ちになります。

もっとこのことを周りのひとに伝えて行かなくてはと思うのです。

たわしの読書メモ・・・ブログ 344

・鎌田慧『六ヶ所村の記録——核燃料サイクル基地の素顔 (上) (下)』岩波書店(岩波現代文庫)2011

鎌田さんは巾広く活躍しているルポ・ライターです。「さよなら原発 1000 万アクション」の世話人的ひと、わたしの原発関係の読書では、ブログ 163 の鎌田慧『原発暴走列島』アストラ 2011 の読書メモでとりあげています。

この本はもともと岩波から 1991 年に出され、1997 年の講談社文庫版を元に、フクシマ後に、少し文を書き足して岩波現代文庫に 2011 年に出されたものです。反対運動をになってきたひとたち、推進派、そして翻弄されていくひとたちにていねいな、継続的なインタビューをしながら書き上げられた貴重なルポです。

これは、青森県の下北半島を大規模開発地域と設定しつつ、それが破綻しつつ、原子力施設を誘致し、原発建設と再処理施設・核のゴミの収容施設化して行っている記録です。

そもそも、下北にという過疎地に開拓として入植というところから始まり、戦前・戦中の「満州開拓団」として行って戻ってきたひとたちも開拓として入り、政府の農業政策に翻弄され、そして開発と称して土地を買われていく中で、最初からあった核ということが隠蔽される中で、再度核施設ということが浮上してきます。そして、金と策謀が渦巻く中で、ひとが切り裂かれていく、「開発」ということがもつ意味、まさに下北自体が、日本の中央の植民地的存在になっていく、中央の地方の収奪、農業や漁業という第一次産業の破壊と収奪の構造がとらえられるのです。ひとが生きるのにもっとも必要とされる農業や漁業が、工業や金融などから押しのけられていく、そのことが現代資本主義のグローバルゼーションとして進む、最前線のひとつです。

「満州」の開拓という名の「侵略」の問題とも類比し、加害—被害の構造もとらえ返しています。この著者は単なる事実を書いていくのではなく、その中で翻弄されていくひとを描こうとしています。反対運動のひとや、金で推進していくひとたちも。

まさに金儲けやその手先になっていくひとたちに倫理などないのだということが、如実に示されています。

この本を読みながら、なぜ原発、核ということ、理不尽なことが受け入れられていくのか、その構造の一端のようなことがつかめつつ、怒りと悲しさの思いに深くとらわれていきます。

印象に残った著者のインタビューをうけたひとのことばや、著者のことばを切り抜いておきます。

「畑も部落も人間の心もこわされてしまった。」 239P

「後進国、百分の一の価値、県の元幹部の屈折は、中央主権国家の属国あつかいされてきた歴史の反映である。」 314P

「植民地支配だった。・・・」 306P

「まもなく核依社会は終わろうとしている。核社会の危機はようやく理解された。後は、ひとりひとりの反対の声と行動である。」 330P・・・フクシマが起り、なおかつまさかの再稼働がなされているとき、「理解され」ているとは言い難い情況が・・・

「いまや、原子力増強政策からの縮小が、世界の常識的な方向なのだが、遅れてきた日本の猛進と玉碎主義は、「満州」から「パールハーバー」にむかった独断を思わせて余りある。」 334P

## 映像鑑賞メモ

渋谷のアップリンクで見た映画です。アフタートークもありました。この映画には出ていないユーザーと監督との対談でした。

たわしの映像鑑賞メモ 015

### ・宍戸大裕「風は生きよという」2016

人口呼吸器ユーザのドキュメンタリー映画です。

風とは人工呼吸器が送る風、かなりの強さらしいです。

以前は人工呼吸器ユーザーは「病気」というとらえ方で障害問題とは一線を有していて、医学モデル的「障害」としてとらえられ、「障害の否定性」にとらえられがちだったのですが、今ははっきりと障害の問題としてとらえられ、「障害の否定性」の否定という脈絡も出てきています。

介助者との関係など、「障害者」がたどってきた道筋を体験しながら、「障害者運動」主体として確立していく様子がとらえられます。家族との関係なども含めて、まさに生きるということを身を以て示してきています。

ですが、ここに至らないひとの方がおそらく多数派であることを押さえつつ、「障害の否定性」の否定ということをきちんと提起していく、そしてまたこのようなドキュメンタリー映画を観たひとたちからの発信を広めていくことが必要になっています。そして日常的に圧倒的に社会的状況が、優生思想的なところが蔓延している、そしてそのような中で相模原事件がおきたことがとらえられます。政治的なところでファシズム的なことが広がっていくことが、優生思想のようなことが蔓延していにもつながっていることを押さえ、それを止める政治的な活動も必要になっているのだと思うのです。くこと

『反障害原論』への補説的断章 (23)

### 「吃音＝発達障害」規定をとらえ返す

今、「吃音者」の団体一言友会で、「吃音＝発達障害」と規定して「障害者手帳」を取り、「吃音者の社会運動」を進めようという動きが出ています。わたしは、かねてから「吃音者」を「障害者」として規定して、「吃音者の障害者運動」を進めようとしていた立場ですが、何かおかしいと思っています。わたしは、幽霊会員のようになっていますが、今、広く意見を求めているようなので、意見を書き置きたいと思っています。

さて、「吃音＝発達障害」論ですが、これが出てきたのは、ICD-10で「障害の規定」の中の「発達障害」という項目の中で、「吃音症」ということばが出ていて、厚労省がそれを根拠に、「吃音を発達障害として障害認定しよう」という動きをしていて、「吃音者の団体」

で、それを根拠に「吃音者の社会運動」のひとつとして、「障害者手帳の取得=障害者認定」を進めようという動きのようです。

ちゃんと、現実的にどういう議論がなされてきたのかということをも学的に探求して、押さえ直す作業が必要です。わたしにとっては不毛(\*1)なことなので、かなりの推測を含んで文を書いて仕舞います。事実関係に誤りがあれば指摘してもらい、共に整理して行き、その中で互いに論考を深め得ればと願っています。

### 障害規定からとらえかえす

まず、ICD-10 のとらえ返しです。WHO（世界保健機構・・・国連の機関）には、かつて疾病の規定をしている ICD（国際疾病分類）とは別に障害を規定している ICIDH（国際障害分類）が別にありました。それが、イギリス障害学発の「社会モデル」の突き出しの中で ICIDH を変えようと、ICIDH-2 として議論していた過程がありました。その内容は、まさにパラダイム転換的内容をもっていたのですが、きちんと理論的に整理されない中で、「社会モデル」自体がパラダイム転換に失敗し、「医学モデルと社会モデルの統合」などというおかしな論理まで出てくる中で、ICF（国際生活機能分類）としてまとめられたのです。わたしは、それをまさに医学モデルでしかないものに舞い戻ってしまったと押さえています。ですが、医学モデルへの批判からそもそも起きていたことだったためか、そして統合を標榜するためか、ICIDH-2 の段階ではあった本文での医学モデル的な内容になっている「障害分類」を消したようなのです。そして、現実には(医学モデル的なところで)「障害者」施策を進めるのに、医学モデルそのものの ICD-10 を「障害分類」に使うというごまかしを取っているのではないかとわたしは押さえています。

さて、「吃音=発達障害」論を使おうという「吃音者」当事者が出てきているのですが、一点押さえて置かねばならないのは、それは医学モデルに沿って運動を進めることを意味するということです。

そもそもイギリス障害学がなぜ医学モデルを批判してきたかということなのですが、それは「障害者が障害をもっている」という論理では、「慈愛としての福祉」とか「かわいそうな障害者をたすけてあげる」というところになってしまい、それでは、結局差別から抜け出せないからです。だから、「社会が障害をもっている」と反転させるパラダイム転換をなそうとしたのです。日本においても、それは「障害者」が「わたしたちが変わるのではなく、社会を変えるのだ」と突き出していたことにつながっています。

そのことを押さえそこなうと、「かわいそうなわたしたちを助けて」というそれ自体が差別的イデオロギーを広めていくことになってしまいます。(\*2)

### ICD-10 の「吃音規定」の位置をとらえ返す

さて、医学モデルでしかない「吃音=発達障害」規定が医学的にどこからでてきたのかということがあります。どうも、ICD-10 で、「発達障害」のひとつの「症状」として「吃音症」を出していることから、「吃音=発達障害」規定を使おうということ、そして厚労省サイドの「良心的な」役人で「吃音者」の援助を考えているひとがそのようなことを考えているようなのです。このあたりは、すべての「吃音者」=「発達障害者」という規定をしていくのか、「吃音者」の一部に「発達障害者」規定があてはまるのかの問題があります。このあたりはきちんと押さえないと、「発達障害者」の認定の中で、「吃音」がカウントさ

れるということにとどまってしまう。逆に言うと、「発達障害者」として認定されるひとが「障害者」認定をとれるだけの問題になります。すべての「吃音者」が「発達障害者」と認定されるのかの問題があるのです。だから、「吃音＝発達障害」としてしまうことは、そうではない、そうではないと思っているひとたちを排除してしまうことになります。

そもそも、「吃音者＝非器質性の非流暢性の言語障害者」という規定がありました。だから、「脳性マヒ者」の「器質性の非流暢性の言語障害者」は「吃音者」とは規定しないということが当初はありました。ですが、少なくとも東京言友会には「脳性マヒ者」の「吃音者」も、そして「失語症」ということばの出にくいひととも例会に参加しているという幅広い活動をしていました。東京ではかつての大阪や全言連のように「吃音者宣言」一本槍で進めようということに対して別の活動スタイルをとっていました。「治す派」と「宣言派」、そして「お友だちグループ派（交流の場―癒しの場ということだけでいいのではないかというグループ）」ということが共存してきたのです（いずれもわたしサイドのネーミングです）。「吃音＝発達障害」規定をしようとしているひとたちは、そのような東京の歴史をどうとらえているのでしょうか？

#### 「吃音＝発達障害」説の検証

さて、そもそも「吃音＝発達障害」という規定をするときに、そもそも「発達障害」ということ自体のあいまいさがあります。『福祉労働』という雑誌の特集で取り上げられました（『季刊 福祉労働 140号 特集:増やされる「発達障害」』現代書館 2013）。いろんな論攷が出ていましたが、そもそも、なぜ「発達障害」ということが浮かび上がってきたのか、そもそも異化していく必要があるのかという趣旨でくまれていた特集です。かつて、わたしが本を出したときに、本を読んだひとから、**すぎむらなおみ＋「しーとん」『発達障害チェックシートできましたーがっこうのまいにちを ゆらす・ずらす・つくる』生活書院 2009** という本を送ってもらい、「書評」を『図書新聞』2972号 2010.7.3に掲載してもらいました。その本の著者は、養護教員のひとたちです。当事者自らが「発達障害者」としての自覚を持ち、そして教員総体が「発達障害」の生徒達にどう接していけばよいか、どういった援助が必要なのかを考えていこうという本でした。わたしも、そのような趣旨に共鳴して「書評」を書いたのですが、そもそも著者達も書いているのですが、教育がひとりひとりの生徒に向かい合う教育になっていないという事態の中で、「発達障害」が異化していく、させていく必要が語られる事態になっているようなのです。

そもそも「吃音＝発達障害」と規定していくときに、「吃音」概念も「発達障害」概念もあいまいになったままです。

「発達障害」を「脳の中の障害」と規定してしまうひともあります。さらに「精神障害＝脳の障害」論なども出ています。

このあたりの議論は、「自閉症＝脳の障害」論が出てきたときからあったことで、わたしは不毛な議論だと思っています。そもそも「障害の社会モデル」がなぜ出てきたのか、ということが押さえられていないのです。

「脳の中の障害」とか「遺伝子決定論」とかは、いわば「障害の素因論」と言われることですが、これで行くと「精神障害」系の「障害」を「身体障害」と区別する意味がなくなります。

さて、どうしてわざわざ素因論を「精神障害」系のひとが持ち出してきているのかの問題があります。それは「吃音の素因論」が、アメリカとかカナダとか、自己責任の論理が広く行き渡っているところで、「吃音者当事者」からも出てきていることに通じる問題なのです。要するに、「自己コントロールできないひと」として「自己責任の論理」で差別されるから、「それは「障害」の問題で、自己責任ではない」として、「自己責任の論理」の抑圧性から逃れるための理論として出てきているようなのです。もちろん、「障害者」総体も、「自己責任の論理」の抑圧性にさらされています。それは、「努力して障害を克服しよう」というかねてからあったスローガンとして端的に現れています。一方で、「努力してもどうにもならない」と認定されれば、この抑圧型の差別から逃れ得ますが、こんどは排除型の差別をうけることとなります。「福祉の対象として社会の片隅で生きよ」のみならず、発生の予防として断種させられたり、出生前診断とか安楽死の対象という抹殺の対象になってきた歴史をとらえかえさねばなりません。「わざわざ」ということばを使ったのは、抑圧型から逃れようとして排除型の差別を招き寄せている事態だからです。よく、抹殺を含む排除型の差別の方が、抑圧型の差別より強いとかとらえ勝ちなのですが、必ずしもそうとはいえないという事例になります。これは「障害の重い—軽いという言い方をするひとがいるけれど、差別に重い軽いはない」という「障害者運動」の先達のことばにもつながっています。これは、わたしがかつて出した本の中で差別形態論として展開したことです。差別の形が変わるだけの問題です。

さて、「吃音=発達障害」を見たときに、わたしが想起したのは、「ろう文化宣言」でした。これは、ろう者（手話を第一言語にするひとたち）が手話を自分たちの言語として誇りに思うという突き出しで、手話を学んでいたわたしも共鳴したのですが、「わたしたちの問題は、障害者の問題というより、手話という少数言語の使用者というところで、むしろ民族問題である」という主張にわたしは違和を感じました。そもそも、そこで言う「障害者」とは何かということがあるからです。「車いすの障害者」も、「バリアフリーになったら、わたしたちは障害者ではなくなる」という突き出しをしていたし、もう一方の「民族」に関しても「民族という虚構」ということがあるからです。

もうひとつ、そもそも「吃音=発達障害」説をとるひとは、他の「吃音理論」をどうとらえているのかの問題があります。「吃音=発達障害」説で会を統一するのなら、他の説を批判しなくてはなりません。わたしは矢野武貞さん（『「吃音」の本質—話行為の構造と病理』（弓立社）1975）の「学習説」に注目してきました。彼の理論でいうと、「吃音者とは吃音的話行為を習得したひとたち」ということとなります。わたしなりの矢野理論の押さえ方によると、「吃音者」とは、発達の道筋としての流暢な言語の習得に失敗したひとたちではなくて、吃音的話行為を習得したひとたち」なのです。ですから、この説では「発達障害」という概念に「吃音」はあてはまりません。そもそも「随意吃」とか、「役者が演技で吃音者を演じていて、そこで吃音的話行為から抜け出すのに苦労した」とかいう話をどうとらえられるのでしょうか？

きちんとした対話が必要です。そうでないところで、ひとつの説で押し通そうとすると他のそう思わないひとたちを排除してしまうこととなります。

わたしは「社会運動」というとき、とりわけ「障害者」の「社会運動」というときの

大原則は、「誰も排除しない、排除させない」ということがあると思っています。その大原則を踏み外して、「社会運動」を標榜することには反対です。

#### 「吃音＝発達障害」規定をすることにどういう意味があるのか？

さて、言友会では長く「吃音者＝障害者」規定を避けてきました。それは、かつて言友会のリーダーであった伊藤伸二さんによると、反対するするひとがいたということなのですが、そもそも「吃音者宣言」を異論がある中で、強引に出したひとなので、「なにをか言わんや」なのです。結局、そこでリーダーシップをとるひとがいなかった、ということなのです。そして、たぶん強引にとる意味もなかったのです。

もうひとつ、押さえて置きたいことがあります。それは「吃音者の社会運動」ということが今回初めてでてきたのではないということです。かつて、「吃音者宣言」が出される前に、東京言友会には「わたしたちの基本的考え」という基調的文がありました。それに沿って、「吃音を治すための研究」に対する補助金を求めていく活動とか、例会で使える会場として東京都障害者福祉会館を作れということを要求していた障都連という「障害者団体」に加盟して、そこで会館を作らせて例会会場として使えるようにしたのです。「吃音者宣言」が出た後は、その中に「治す努力の否定」的内容があり、「わたしたちの基本的考え」もニューバージョンに変えています。そういう中で、「吃音者の社会運動」は「吃音に関する啓蒙的活動」に収束していたのです。

さて、そもそも「吃音＝発達障害」と規定しようとしているひとたちは、何のためにそのような動き方をしているのか、わたしにはよく分かりません。

ひとつは、「障害者福祉」を受けられるようにするということがあります。具体的には、手帳を取得するということです。ですが、現行の「障害者福祉」は等級制度があり、一番の福祉は「障害者年金」ですが、「吃音者」ということ単独で、これが受けられる制度ではありません。

もうひとつ、「障害者雇用枠」での就労の問題があります。今仙台で「障害者雇用枠」での採用というところで、認定を受けようと裁判をしているひとがいます（このひとは、あくまで「言語障害者」として「障害者認定」を受けようとしているようですが）。

わたしはこれは諸刃の剣だと思っています。「吃音者」が「障害者手帳」をとれるということならば、一般就労していた「吃音者」が、雇用枠に移行しろと言われるようなことさえ起きることが考えられます。さらに、そもそも「障害者雇用枠」が、特定子会社ということで別枠になっていたり、非正規雇用が拡大している中で、非正規雇用的なところに落とし込まれたりすることもあります。「障害者雇用枠」で入ったひとは、女性が総合職と一般職に分けられる中で、女性のほとんどが一般職に入れられるようなことと同じように、出世コースから外されたところでの「障害者雇用枠」になっている現実があります。

それに、そもそも「障害者雇用枠」で入ろうということ自体が、雇用枠の拡大運動と一緒に展開しない限り、他の「障害者」の枠を奪うことになる現実をどうとらえているのでしょうか？

もうひとつ、「障害者認定」を受けておくと、相対的にですが、生活保護をとりやすくなるということがあります。ですが、そもそも生活保護が切り下げられ、受給資格を巡って抑圧的情况があるときに、それ自体の社会運動が必要になっている状況です。

さて、わたしは言友会から飛び出して、しかも「吃音者＝障害者」という突き出しをしながら、「障害者運動」に関わる中で、他の「障害者」に、手帳をもっていないという、「どうして取ろうとしないのか、障害者認定を受ける運動をしないのか」ということを訊かれることがたびたびありました。その中で、語っていたのは、「現在の障害者福祉の制度の障害認定の中では、何のメリットもない、もし何かわずかなメリットのようなことがあっても、分断されるだけだ」と応えていました。

で、「そもそも障害とは何か」という議論をしながら、現実には「障害者」当事者の立場を突き出して「障害者運動」を担っていました。

#### **わたしの「吃音＝発達障害」規定への暫定的意見**

そもそも、わたしにとってどうでもいいことなのですが、たぶん議論しているひとから意見を求められるので、「吃音＝発達障害」規定をわたしがどうとらえているのか、ということにコメントしておきます。

そもそも「発達障害」の概念自体が、「医学モデル」的にもはっきりしません。「アスペルガー」とか「広汎性」とか「自閉症スペクトラム」とか、大分類的なところが出てきていますが、その他ADHDが大分類なのか、「発達障害」の認知のひとつの「症状」的にとらえるのかの議論が出ているようです。さらに、「学習障害」についても大分類的かどうかあいまいな形で出ているのですが、わたしはこれはひとつの症状的にとらえることで、「吃音症」ということに関しても、「症」とつけているように、わたしはひとつの認知の徴表ではないかと思うのです。ですから、そのあたりが整理されていくと、「吃音＝発達障害」ということでなく、「発達障害」と認知していくひとつの徴表として押さえられ、「発達障害」と認知された「吃音者」が、福祉の対象になるということで限定されていくと思います。だから、わたしは、「障害者手帳」を取るのなら、むしろ正攻法で「言語障害者」としての認知を勝ち取ることだと思います。

これはあくまで、医学モデルの枠内での運動の進め方です。

わたしは医学モデル的な運動の進め方ではなくて、医学モデルから「社会モデル」さらには関係モデルへの転換を訴えています。後で、もう少し詳しく書きますが、そこでは、反障害運動、その中の反コミュニケーション障害運動という形での展開になります。

#### **「吃音者の社会運動」の方向性**

そもそも何をしようとしているのか、よくとらえられません。認知を得て手帳を取得するだけが目的なのでしょうか？ そこで、雇用枠で就職できるようにするというのもあるのだと思いますが、前述したように現実のメリット・デメリットがあります。「社会運動」ということばを使われているので、おそらく「障害者運動」に合流していくということもあるのだと思います。たぶん、それは「社会モデル」では、そもそも不利益を受けることを障害として押さえ、貧困とか引きこもりとか、シングルマザーとかすべてのことを含めた障害概念につながり、社会運動ということまで結びついていく可能性もあるのだと思います。また、このあたりは社会運動的にもっと巾広い、「すべてのひとにベーシックインカムを！」というところでの運動や基本生活保障の問題につなげていくことだと思っています。

今回の提起は、「発達障害者」の運動に合流しようという提起のようですが、そもそも合

流すべき「発達障害者」の当事者運動がどこまで進んでいるのでしょうか？ 何年か前に、「日本で初めての発達障害者当事者主催の集会」と名打った集会に参加したことがあります。その中で、「明るく前向きに生きる」というスローガンのようなことが出ていました（\*3）。30年前の言友会の「吃音者宣言」的内容なのです。それに、「発達障害者」の運動自体が当事者の周りのひとたちで動いてきた経緯があるようなのです。「吃音者の社会運動」というとき、そのあたりも、ちゃんと押さえて置かないといけないと思います。

それにもうひとつ、「障害者運動」総体の混乱的情况もあります。障害の定義さえあまいにしたままになっています。他の「障害者」団体に合流していくというとき、きちんと「障害者運動」の方針を出せている「障害者」団体、合流できる「障害者」団体がどこにあるのでしょうか？

今回、全国大会で「障害とは何か」という議論をしようとされているようですが、そもそもその提起をしているひとたちの間で、障害を巡る議論がどこまで進んでいるのでしょうか？ もし、きちんと議論が進んでいるのなら、医学モデルでしかない、「吃音＝発達障害」規定で「吃音者の社会運動」を進めようという動きにはならないとわたしは思っています。

さて、具体的提起です。

#### 「吃音者」は社会に何を求めていくのか？

一体何をしようとしているのか、一体何を「社会」に要求していくのかの問題です。

これまでも「社会運動」的なことはありました。そのことは「吃音」についての啓蒙的なことでした。そのことを超えて具体的に何を要求していくのかの問題です。今、上がっているのは手帳を取るということです。それで雇用枠で入れるということがあります。ですが、前述したように、それが必ずしも良い方向に進むわけではないとも言い得ます。でも、それでもメリットがあるということで使いたいというひとはそこで動けばいいのですが、メリットがないと思うひとがいます。それなら、メリットがあると思うひとがメリットがない、逆にデメリットが大きいというひとを排除して、強引に進めることはないと思います。会の中でグループを作って進める、または逆に「発達障害者」の団体の方でグループを作って進める、勿論並行的にもありえるのですが、とにかく、言友会総体として、「吃音＝発達障害」規定で統一して、「吃音者」の社会運動を進めることではないと思います。

そもそも何を求めていくのか具体的に考えてみることはないかと思えます。

たとえば、機器関係の要求があります。パソコンを会議で使えば、音声読み上げソフトなど出てきますから、あらかじめ用意をしておけば、ほとんど支障はなくなっていきます。それどころか、事前に資料を配付することで、逆に議論的深化をもたらすことができます。質疑応答が必要になっても、パソコンで打ち込めば、読み上げソフトで声を代わり出してくれます。たぶん、現代社会において人間関係が大切で、個人的にはなしを煮詰める、一対一的な処で話をしていく必要が言われます。ですが、そもそも障害問題の認識が共有されれば、「吃音」自体がかなり受け入れられていきます。どうしても声を出す必要があり、声が出ないときに機械を使う、もしくはひとに代読してもらうという方法でやれます。

その他、どういう要求—運動があるのでしょうか？ もうひとつ、具体的例を出しておき

ます。実は、「発達障害者」の方で、そのヒントになる文を書いているひとがいます。綾屋紗月＋熊谷晋一郎『発達障害当事者研究—ゆっくりていねいにつながりたい』医学書院2008の綾屋紗月さんが、手話を学んで心が開かれたというような趣旨の話を書いています。

「吃音者」というのは、「ひとは音声言語で話すべきだ」ということと、その「音声言語の流暢性」ということで、言語規範から外れるとして、「言語障害者」と規定される者なのです。手話を自分の言語として習得すると、「吃音者」は、手話に通じる世界では「(言語)障害者」でなくなります(\*4)。問題は、手話に通じるひとが少ないということ、手話を自らの言語とするひとにコミュニケーション保障がなされていないということです。わたしは今「ろう学校」と言われるところ(\*5)を、手話学校にして、聞こえないひとたちだけでなく、手話を自分の第一言語にしたいひとたちに解放して、音声言語を使わなくても支障がない状況をつくりえればと思っています。

その他、具体的にどのようなことを求めていくのかの議論こそが必要で、それこそが「吃音者の社会運動」の中身なのだと思います。

#### そもそも社会運動とは何か？—具体的な運動の進め方

そもそも社会運動というとき、社会のあり方の問題があります。そもそも「障害とは何か」の議論をするとき、そこに disability—「できない」ということが問題になっているとき、なぜ、それが(ひとりで)できないといけないのか、なぜいろんなひとりでできないことがあるのに、それが「障害」として浮かびあがるのかという問題があるのです。

わたしは障害モデルとしては、障害関係論の立場をとります。「吃音者の社会運動」は、反障害運動の中に位置づけられます(それらについて書き始めると長くなり、読むに耐えない文になります。読んでもらえる方は、わたしの本やホームページを参照にしてください(\*6))。その運動の下位分類として、反障害運動の中に反コミュニケーション障害運動があり、その中に「言語の非流暢性」を巡る課題で運動を進めるというようになります。運動体的に表現していくと、「反障害運動」—「反コミュニケーション障害運動連絡協議会」—「反コミュニケーション障害運動連絡協議会・言語非流暢性部会」というようになります。そもそも、「吃音＝発達障害」という概念自体が医学モデルなので、わたしはそのような押さえ方はしませんが、医学モデル的「発達障害」概念は、わたしはコミュニケーション障害の中にも含まれていると押さえています(関係モデル的各論もわたしの本の中で既に展開しています)。「発達障害」という規定がどのようなところでできているのか、言い換えれば「発達障害者」という規定されているひとがどのような差別を受けているのかについては、自らが「発達障害者」と規定されているひとたちが当事者主体で提起されていくことで、その提起を受けてわたしも反障害運動の連帯として議論に参加していきたいと思っています。

とにかく、障害規定からちゃんとなされていない状況を押さえ、そこまで掘り下げたところで、根底的な反障害運動を作りだしていきたいとわたしは動き出しています。共に議論と運動を作り出せばと願っています。

註

\* 1

なぜ不毛ととらえるのかということ、そもそも素因論から、医学的などところで治療というところで「吃音」をなくす、なくす研究を求める行為が、もし、素因論が正しい(わたしは素因論を批判してきたのですが)としても、突然何か治療法が発見されない限り、むしろ存在の否定につながるし、発生の予防とか、断種とか、自ら結婚しないとか、抑圧的にも働いていくからです。この議論は、全言連の会報に「吃音の遺伝子研究に協力を」という趣旨の文が乗り、それに対する批判をし、議論をする時に文を出し、討議にも参加しています。冊子になっていますからそれを参照してください。

\* 2

その議論の間に人権論があります。しかし、人権概念自体が、差別のない関係を作るというところで、天賦人権論として作られた架空の概念です。そして、そもそも能力による差別は人権の問題でないとしています。ですが、そもそも障害差別の土台には、労働力の価値を巡る差別の問題があります。その差別を問題にしないかぎり、人権論では障害差別は偏見の問題しか扱えなくなります。そもそも人権ということ自体を否定していく風潮が出ているときには、そのことから批判していく社会運動が必要になるでしょう。

\* 3

大方そのような議論が占めたのですが、ひとり、もっともしんどいひとを基準にして、ベーシックインカムを運動を進めて行くというような話をしている、他のひとから浮いている感じのひとがいました。高森明というペンネームで「発達障害」関係の本を沢山出しているひとです。

\* 4

「音声言語障害としての吃音」の話ですが、手話にも「言語障害」に比する、「吃音」的なことがありますし、「手話を表すのに障害があるひとたち」(たとえば「上肢障害」と規定されるひとたち)という「構音障害」に比することもあります。わたしは、侵略の歴史をもつ現在の国際共通語を廃棄し、手話を国際共通語にというような思いも、一瞬もったことがあります。そこでは、「音声言語障害としての吃音」は障害ではなくなります。しかし、それは「視覚障害者」に不利益をもたらすと、すぐに打ち消しています。

\* 5

日本語は、少なくとも日本音声言語—書記言語と日本手話の二つがあり、日本手話が日本語として対等な言語として認められ、公用語として認められ、どちらを選択しても不利益がないようになったら、むしろ手話学校にいて、手話を学ぶと生活が保障される(過渡的なこととして書いています。みんなが生活保障される社会への過渡です)と、コーダー(両親がろう者の聞こえるこども)や「言語障害者」も自分の第一言語として手話を選択するようになっていくのではないかとも思っています。

\* 6

三村洋明『反障害原論—障害問題のパラダイム転換のために—』世界書院 2010  
HPは <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/newpage1.html> (反障害—反差別研究会 反障害 で検索すると出てきます)

## (編集後記)

◆巻頭言の文、驚愕の事件へのコメントですが、わたしは起こるべくして起きた事件ではないかと思っています。普通のひとの「ぼっくり死にたい」とか、差別的ホンネが出てくるところで、日常的に語られていたことが、ファシズム的な動きの中で、実行するひとが出てきたということなのです。日常的な優生思想や、「障害の否定性」自体をきちんと批判していかななくてはなりません。「障害の否定性」の否定をライフワークにしてきた立場、なんとか理論的な深化と拡大をしていかななくてはと思っています。

◆参議院選挙、この間の国政選挙の同じごまかしパターンです。選挙前に批判を受けることはしないで、選挙が終わると強行政治に移ると同じことを繰り返しています。そしていつも、「結局お金でしょう」ということで、安倍首相たちの一番やりたいことは争点隠をし、経済政策を争点にします。そして選挙で勝つと、争点隠ししたことも公約に書いていたのだから、信任を得たとして、選挙が終わった直ぐに、強行政治に転換するのです。しかも、今回はもう経済政策のアベノミクスはもう破綻が明らかになっているのに、「アベノミクスは道半ば」などというのはどう考えても大嘘です。そもそも初めから間違えている政策なのです。「障害者自立支援法」が議員立法で作られるとき、自民・公明党は「持続可能な福祉政策」と突き出しました。そもそも1990年代にはグローバリゼーションが世界を覆い高度経済政策などあり得なくなっていたのです。だから、資本主義を維持しようとする、「持続可能な経済政策」を突き出す事です。ですが、そもそも資本は悪無限的利潤追求を求めます。それをやるには、世界的な収奪・格差の拡大、国民国家内の格差拡大をもたらします。それがテロの頻発、貧困での餓死、事故・事件という形での反作用をもたらします。だから、政治が富裕層に負担を求め、「持続可能な経済政策」を進めることなのですが、日本では、というより世界的に、金持ちのための政治を続け、ますます矛盾を拡大していきます。そこで起こる反対運動を押さえるために国家主義的政治、更に戦争とファシズムへの道を進もうとするのです。そして、マスコミ操作による矛盾の隠蔽を進めます。そういうことのまさに典型が安倍政治なのです。

◆ごまかしの政治の極は、安倍首相のつれあいの昭恵夫人が、「家庭内野党」とか言って安倍政治のごまかし政治に「内助の功」を發揮していることです。そもそも自民党の選挙運動で応援演説とかしているひとが、「野党」なんて大嘘です。沖縄・高江に強権的弾圧の後に行って、「対立、分離した世の中を、愛と調和の世界にしていくための、私なりの第一歩・・・」とFBに書いています。対立、分離した世の中を作ったのは、安倍政治です。反差別論ではこれを融和主義といいます。差別に屈服しろと言っているにすぎないこと、そんなことにごまかされるひとがいる。

◆「読書メモ」は、原発関係の読書メモです。運動的にも、理論的作業も立て込んでいたので、この際すつと読める原発関係の読書をしていたのですが、『六カ所・・・』は上下あり、かなり重たい内容でした。今、昨年のノーベル文学賞を受賞した『チェルノブイリの祈り』を読んでいます。すごくこころ揺さぶられる本です。この本を多くのひとが読んだら、原発再稼働などあり得ないという思いが広がっていくと思います。読書メモ次回です。これを終えたら、原発関係の本を読み、廣松シェーレのひとの本を1冊読み、障害学に戻る予定です。その間にいくつか本を挟むかもしれません。

- ◆映像鑑賞メモは、「風は生きよという」です。「生きること自体が闘いになる」ひとりたちのその中において、「障害の否定性」を否定する言説が出てきています。
- ◆次号は早く出しておきたい文があるので、早めに出すかもしれません。

## 反障害－反差別研究会

### ■会の性格規定

今、‘障害’という言葉ほど混乱した使われ方をしている言葉はありません。わたしたちは「障害者が障害を持っている」という医療モデルから、「障害とは社会が障害者と規定するひとたちに作った障壁と抑圧である」という「障害の社会モデル」をとらえ返し、更に、「障害とは関係性の中で、「障害者」に内自有化する形で浮かび上がる」という障害関係論への、障害概念のパラダイム（基本的考え方の枠組み）の転換を図ります。そのことを通して、障害のみならず他の差別をなくしていく反差別の理論を作り上げ、その運動に参画していきます。このホームページにアクセスしてきた方との議論の中で、ともに深化と広がり求めていきたいと願っています。

■会という名で出していますが、まだ個人発の一方的発信の域を出していません。もとより、働き掛け合いとして設定したこと。読者の皆さんが活用して頂けたら、またメーリングリストみたいな形に展開していけたらとも思っています。

### ■連絡先

Eメール [hiro3.ads@ac.auone-net.jp](mailto:hiro3.ads@ac.auone-net.jp)

HPアドレス <http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/>

ブログ「対話を求めて」 <http://hiroads.seesaa.net/>

ホームページトップ

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/newpage1.html>

「反障害通信」一覧

<http://www.k3.dion.ne.jp/~ads/httpwww.k3.dion.ne.jp~adsnews.html.html>